海外協定校長期派遣留学報告書

氏名：正井陽寧

学部学科名： 生物産業学部　海洋水産学科

留学先学校名　カセサート大学

1. 留学の目的

留学の目的は、淡水魚養殖技術を習得することと、水産分野における専門的な英語力を向上させることであった。将来的には、錦鯉の生産を行う父の後を継ぎ、水産養殖学の学術的知見を生かした錦鯉生産を実践できる養鯉業者になりたいと考えている。また、留学で得た国際経験を基に、日本の養鯉業の海外展開や情報発信にも貢献したいという思いから、本留学に挑戦した。

一つ目の目的は、淡水魚養殖技術を実践的に学ぶことである。私は大学で遺伝の観点から魚類を研究する研究室に所属しており、コイに関する研究に取り組みたいと考えている。一方、日本では淡水魚養殖施設が限られており、実践的な養殖技術を学ぶ機会は決して多くない。そのため、淡水魚養殖研究が盛んなタイへの留学を強く希望した。

留学先であるカセサート大学では、水産学部を中心にティラピア、コイ、ナマズなどの淡水魚養殖に関する研究が盛んに行われている。特に、養殖池における疾病対策、飼料成分と成長・免疫・体色との関係、水質汚染の調査、遺伝資源を維持するためのクローニング技術などに関心を持っていた。また、環境負荷を考慮した持続可能な養殖技術の研究や、養殖業者と大学が連携して養殖が自然環境へ与える影響を調査する取り組みは、淡水魚養殖が盛んなタイならではの特色であり、大きな魅力を感じていた。

本留学では、実践的な養殖技術だけでなく、研究成果を現場へ還元する仕組みや持続可能な養殖の考え方についても学び、それらを将来の錦鯉養殖や大学院での研究活動に生かしたいと考えた。

二つ目の目的は、水産分野における専門的な英語力を向上させることである。近年、錦鯉は海外で高い人気を集め、日本からの輸出も拡大している。しかし、飼育管理や疾病対策に関する専門的な情報発信は十分とは言えず、海外で錦鯉を適切に飼育する上で課題となっている。そのため、水産学で用いられる専門英語を習得し、飼育技術や研究成果を海外へ発信できる力を身に付けたいと考えた。また、正しい情報発信を行うことは、日本産錦鯉のブランド価値を守り、海外産との差別化にもつながると考えている。

以上の二つの目標を達成するため、専門知識の習得だけでなく、現地での実践や国際交流にも積極的に取り組み、実りある留学にしたいと考えていた。

2. 現地での生活について

（住居、キャンパス、友達との交流、余暇の過ごし方など）

現地では、カセサート大学の国際寮で生活していた。寮は二人部屋であったが、私は一人で使用していた。部屋にはキッチンが備え付けられていなかったため、別棟にある共有キッチンを利用して自炊を行っていた。寮から徒歩約 7 分の場所にはバンコク中心部へアクセスできる電車の駅があり、買い物や観光なども便利な環境であった。

キャンパスは寮から約 1 ㎞離れており、敷地も非常に広いため、自転車を購入して移動していた。キャンパス内には熱帯植物が多く植えられており、自然豊かな環境の中で学生生活を送ることができた。

寮には日本人留学生も多く生活していたが、私は主に水産学部のタイ人学生との交流を深めた。授業後には一緒に料理をしたり、釣りや外食に出かけたりと、学内外を問わず多くの時間を共に過ごした。屋台でタイ料理を教えてもらったり、文化や生活習慣について話を聞いたりする中で、教室では得られない多くの学びを得ることができた。

また、水産学部の先生方も留学生である私を温かく受け入れ、生活面・学習面の両方で手厚く支援してくださった。学生・教職員を問わず、「何か困っていることはないですか。サポートするよ。」と自然に声を掛けてくださる方が多く、人との温かいつながりに支えられながら安心して留学生活を送ることができた。

休日には寺院や歴史的建造物、図書館などを訪れたり、さまざまなイベントに参加したりして過ごした。観光や外出を通して、多国籍の人々が集まるバンコクの活気や国際的な雰囲気を肌で感じることができた。一方、暑さの厳しい日には自室や冷房設備の整った図書館、ショッピングモールで過ごすことも多く、現地の生活スタイルにも徐々に慣れていった。

3. 留学を通じて学んだこと

本留学を通して、専門知識だけでなく、異文化理解や主体的に行動する姿勢の重要性を学んだ。

専門面では、ティラピア、ベタ、グッピーなどの養殖場見学を通して、淡水魚養殖の現場を実践的に学ぶことができた。飼育管理方法や養殖設備、流通方法、疾病対策など、日本では経験することが難しい養殖技術を実際に見学し、大学で学ぶ理論と現場を結び付けて理解することができた。特に、養殖業者と大学・研究機関が連携し、科学的根拠に基づいて養殖技術や社会的課題の解決に取り組む体制は大変印象的であった。こうした産学連携の仕組みは、持続可能な養殖業を支える重要な要素であることを実感した。

また、授業や実習、研究室での活動を通して、水産学に関する専門的な英語を用いて学ぶ機会が多くあり、英語で専門分野について議論したり質問したりする力が向上した。留学生の案内や現地学生との交流では、多様な文化や価値観に触れ、自分とは異なる考え方を理解しながらコミュニケーションを取る姿勢を身に付けることができた。

さらに、タイ各地を訪問し、歴史や宗教、地域ごとの文化の違いを実際に体験したことで、一つの国の中にも多様な文化が存在することを学んだ。現地で生活し、多くの人々と交流した経験を通して、自ら積極的に行動することの大切さや、新しい環境へ挑戦する姿勢が身に付いたことも、この留学で得られた大きな成果である。

4. 留学経験を今後どのように活かしていきたいか

留学で得た経験は、今後の研究活動と将来の養鯉業の発展に活かしていきたいと考えている。帰国後は大学院へ進学し、コイに関する研究に取り組みたい。その際、タイで学んだ淡水魚養殖の実践的な知識や、現場と研究機関が連携する仕組みを参

考にしながら、学術的な知見を養殖現場へ還元できる研究を目指したい。

将来的には家業である錦鯉養殖を継ぎ、生産現場に科学的知見を取り入れた養殖を実践したいと考えている。また、留学で身に付けた専門的な英語力や国際交流の経験を活かし、海外の生産者や愛好家との情報交換を積極的に行うことで、日本産錦鯉の魅力や適切な飼育方法を世界へ発信していきたい。

さらに、今回築いた海外の学生や教員とのつながりを今後も大切にし、国際的な視点を持ちながら学び続けたい。留学を通して得た知識や経験、人との出会いを今後の研究活動と養殖業の発展に活かし、日本と海外をつなぐ養鯉業の担い手となることを目標として努力を続けていきたい。